

松下幸之助 ― 人を育て、人を活かす

自らの思い、願いを訴え続ける

創業者は、自らの思い、願いを様々な機会をとらえ、様々な手段を使って、社員に訴えかけた。そして、その理解や共鳴を得るために非常な努力を傾け続けてきた。



1951年（昭和26）合同朝会で帰朝報告する

1933年（昭和8）には、所主である自らの意向を幹部に伝達するための「所主通達」の発行を開始した。また、この年から朝会を開始したが、毎朝、社員に話した内容を「一日一話」として配布、翌1934年には所内新聞を創刊した。

当時、秘書として創業者に仕えた松本邦次は、その頃の様子を次のように語っている。

「当時の所主の一日は、毎朝、本店の朝会に出席し、店員に5分か10分、話をするところから始まりました。そのことによって、責任者として自分がいま何を考えているか、経営を進めていく上で大事なことは何か、といったことを店員の人たちに知らせ、教育しようとして努めていたのだと思います。そして、その時々のお話は、私を含め、二人の秘書が筆記し、その日のうちに要旨をまとめて所主に報告しました。所主はそれを見て、自分の話がどのように皆に受け止められたかを確認し、自分の話し方を反省されていたのです。これは後に『一日一話』という冊子にまとめられました。

ある時、社員のカウンセラーとしてお世話になっていた小学校の校長先生方を歴史館に案内した時のことです。そのうちのお一人がそこに展示してある『一日一話』をご覧になり、こう漏らされたのです。

『私は小学校の教員を40年間も務め、世間の子弟をあずかっていろいろなことを言ってきた。ところが、言ってきたことが何一つ残っていない。実に無責任な教師であった。それに対して松下幸之助さんは、金儲けのうまい人だとばかり思っていたが、それだけではなかった。金儲けよりもっと大事なことは人を育てることだということで、そのことに心血を注いできた人だ。それがあの本からよくわかった。私は社会から子弟をあずかって、教育者だという顔をして、よく今までやってきたものだ。恥ずかしい』

パナソニックの社史室には、創業者の話を録音したテープが2,000本以上残されている。その半数が社員に向けた発言である。また、話をするだけではなく、社内広報のあらゆる媒体を駆使して、徹頭徹尾、社員にメッセージを発し続けた。それはひとえに「**自分の志を継いでほしい**」という願いの表れであった。



1981年（昭和56）社史室を視察し、膨大な数の映像フィルムや写真フィルムに見入る

©パナソニック ミュージアム 松下幸之助 歴史館